奄美大島における葬送祭祀儀礼の実践
―龍郷町円（えん）集落の事例研究から―

立神作造

はじめに

奄美と沖縄は、琉球王府支配下における言語、習俗を共通基層にしながらも、葬送祭祀儀礼などに相違が見られる。奄美諸島における葬送祭祀儀礼[1]は近代以前の藩政期までノロ（神女）やユタ（霊能力者）によって司られてきた。明治期に入り、これらの民俗宗教に加え、仏教、キリスト教、新興宗教の天理教、創価学会など、信仰として受容の濃淡はあるにせよ多様な宗教が混在した社会となり、現在に至っている。

奄美諸島において明治初期の鹿児島県庁は、それまで行われていた風葬、洞穴葬（ギシ・ヂシ）を禁じ、土葬への移行を命じた。「沖永良部諸事改正令達適用録」によれば、それまで村落共同体としての集落（シマ）[2]の人々だけで執り行ってきた葬儀（自葬）を明治5（1872）年に、神官か僧侶に依頼すべきことを県庁が通達した。さらに、明治11（1878）年に神官のみが葬儀を行うことを通達した。これは明治元（1868）年に発令された神仏分離令の影響によるものと考えられる。

つまり、自葬を外部化せよ（津波 2012:82-83）と命じているのである。このことが奄美諸島における葬送儀礼に変化をもたらす契機となっている。

奄美の人が、これらの移行措置に対して直ちに応じたわけではなく、集落によって、それぞれに異なる受容の仕方で局所的な改変を加えながら奄美独自の葬墓制を形成してきたと考えられる。葬儀社の関与による葬送儀礼の外部化は、土葬に伴う外部化の約1世紀後に第2の外部化として起きていると考えられる。

鹿児島県庁からの行政指示によって風葬から土葬に移行し、それに神官や僧侶の関与も加わったが、奄美の葬儀においては、宗教者はさほど重要視されていないし、また宗教としても根付いていないという特徴がある（ここではキリスト教、新興宗教に関して論考外とする）。

従って、葬儀式は仏式が一般的となっているが、葬儀場での告別式には葬儀社が手配する宗教者の介在がある一方で、通夜、法事には必ずしも宗教者は介在しない場合が多いと考えられる。本報告書では、ユニークな葬送祭祀儀礼を保持してきた奄美諸島において、高度成長期以降の都市部への労働人口流出と少子高齢化による人口減少がシマの葬送祭

祀儀礼においてどのような影響を及ぼしているかを分析する。この調査は、2016 年 11 月から 2016 年 12 月まで断続的に実施した。

Ⅰ．先行研究における問題点の所在と研究目的

奄美諸島は、1609 年の薩摩藩による琉球侵攻以来、明治 4（1871）年の廃藩置県により薩摩藩が廃され鹿児島県に組み込まれ、明治 12（1879）に奄美群島は大隅国に編入され大島郡が設置された。廃藩置県までの約 260 年間、薩摩の直接的、間接的影響を受けてきたと考えられる。津波（2012）によれば、奄美大島における葬墓制の変化は、地域ごと、文化要素ごとに異なっていても全体的には薩摩支配下における文化的影響による同一の視点から捉える（津波 2012:44）ことが出来ると論じている。

山田（2007）によれば、従来の葬儀は、いずれも社会変化、つまり都市化につれて葬儀も共同体的な儀礼から個人的な儀礼へと変化するものと分析されてきた。地方においては都市の生活様式が単純に模倣されるだけでなく、それぞれの地域で多様な対応がなされてきており、葬制の変容が一般に理解されている社会構造の変化よりもむしろ地域の論理によって変化している。従って、葬制の変容は、地域社会の多様な背景によって、葬儀の変容が起きる場合があり、これは地域ごとの近代化過程の中で捉える必要性〔山田:26〕を論じている。

本報告書では、近年における人口減少が龍郷町（たつごうちょう）円（えん）集落の葬送祭祀儀礼においてどのような影響を及ぼしているかを分析するとともに、葬送祭祀儀礼空間における世代間（都市移住者を含む）の役割について考察する。

Ⅱ．調査地の概要（龍郷町円集落）

１．生業の変容と人口動態

龍郷町円集落（図 1、写真 1）は三方を急峻な山に囲まれ、前方は東シナ海に面した、人口（2015 年）196 人（87 世帯）の集落である。1960 年以降の高度成長期における労働人口流出によって過疎化と高齢化が進んでいる地域である。人口は 2006 年に比較して 25%の減少となっているが、その中でも生産年齢人口（15 歳～65 歳）の減少（27.9%減）が大きく影響している。そのような状況下、2006 年の高齢者率 41%が 2015 年には 43.3%と一段と高齢化が進展している集落である（図 2、3）。

かつての生業は、大島紬、漁業（追い込み漁）が中心であったが、その生産高は減少している。近年は年金受給者（生活保護含む）が 43%と大半であり、その他は、役場、郵便

局員、福祉関係、建築土木事業従事者となっている（図 4）。従前の生業であった大島紬、漁業に従事している人も数名いるが、そのほとんどは高齢者である。

図 1　奄美大島

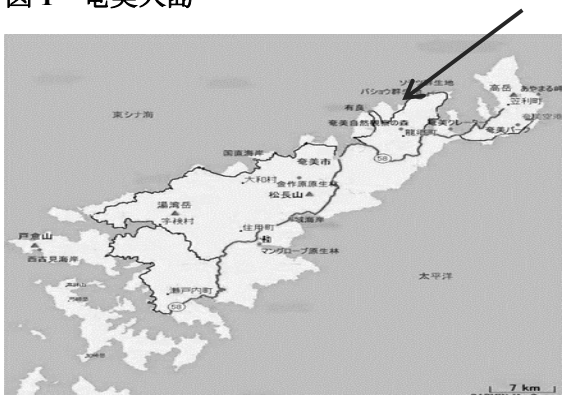


写真 1　龍郷町円集落

図 2　2006 年男女別年齢別構成（人）

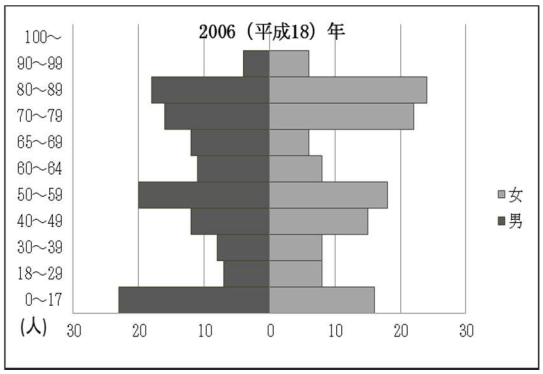


図 3　2015 年男女別年齢別構成（人）

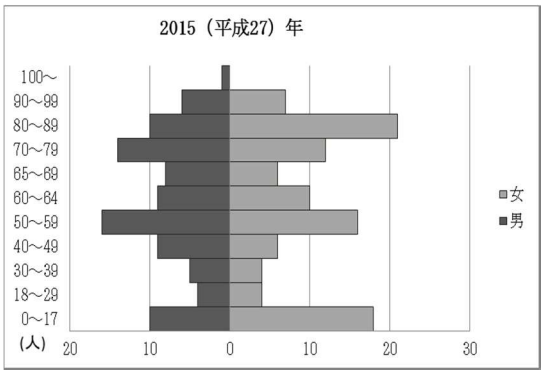
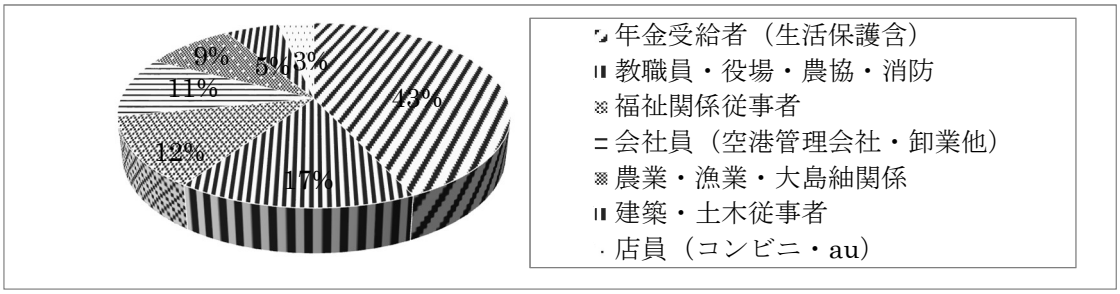


図 4　職業別就業者数（2016 年 3 月末）

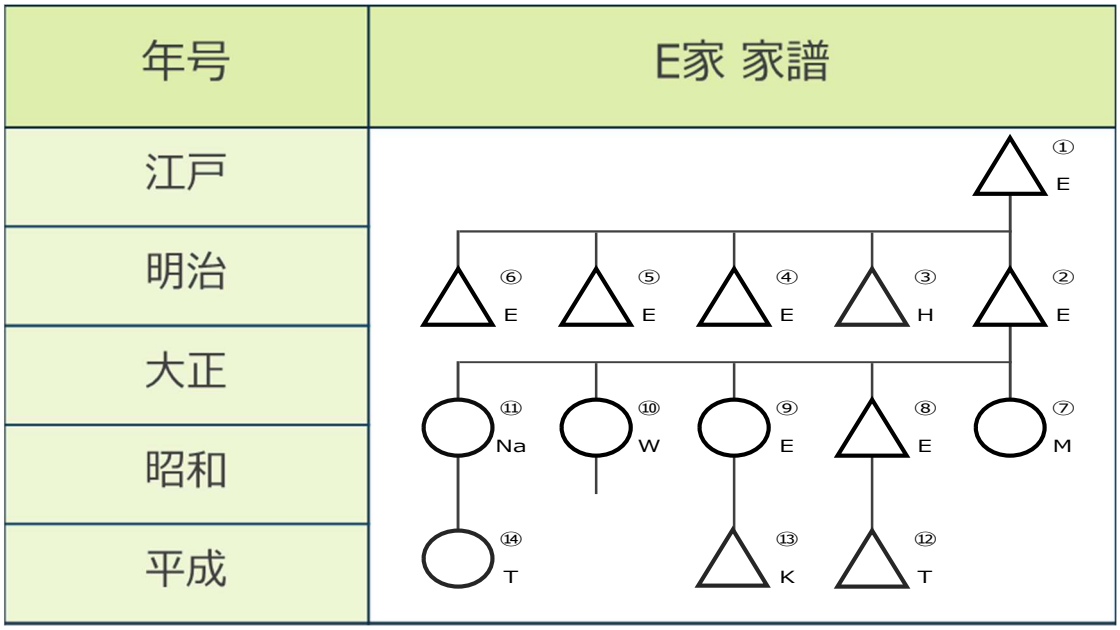


２．姓の変容と地域コミュニティ

奄美諸島における姓は戦前まで一文字姓が過半数であったが、現在は二文字で構成さる姓の世帯が過半数となっている。この理由に関し、及川（2014）は、近代化過程にある社

会一般の動態が示すように、奄美も人口の急増を迎え、明治末期から大正期にかけて家産などを継承できない、あるいは分家相続を与えられない剰余の労働人口が生じることになる。

図 5　E 家系譜図（アルファベットは姓をあらわす）



その動機は、近代史上に奄美の人々が「日本」への同化を求めたことにほかならない。奄美における姓は、図 5 にみられる①と②、⑧と⑫、⑨と⑬は親子関係にある。その中で⑧と⑫、⑨と⑬は親子間で姓の違いが見られ、また、兄弟間②～⑥でも③に姓の異なる場合が見られる。このことは親子、兄弟間でも姓の相違が生じることを許容する論理の下にあったと考えられる。

円集落を含めた奄美諸島の親族組織は、沖縄の「門中」制度を流用した「沖縄移民」からの男系的・直系的な系譜認識と、近隣集落との結びつきを重視する双系的ハロウジ[3]あるいは、父母のヒキ[4]成員で結ばれた組織である。

Ⅲ．葬制の変容

１．土葬（改葬）の儀礼

奄美の土葬の頃の一般的な葬儀方法について、田畑（1992）と津波（2014）の先行研究と地元古老からの聞き取りをもとに記述する。奄美では、死者が出ると通夜、告別式、四十九日などは通常自宅で行われるが、家が狭いなどの理由があると公民館などを借りて行

われていたという。

①通夜

死人が出ると、家の時計を止め、仏壇の戸を閉める。親族の使いが親や集落の人に知らせる。そして親族が集まり、ショクアテ（職当て）をする。大まかには墓さばくり班、大工班、山入り班、炊事班に割り振られる。遺体は家の仏壇の前に安置し、親族や集落の人達は焼香を済ませたのち、飲食をしながら故人の思い出を語り合い適当な時間に帰る。

②準備

葬式は亡くなった翌日に行われ、前夜に割り振られた作業を朝から始める。大きな仕事はイキフリ（池堀り）で、クァンバク（棺桶）を埋めるための２ｍほどの深い穴を掘る。大工はクァンバク（棺桶)、ヤギョ（神社の形を墓)、マカヤドマ（敷物)、マェジュク（前卓)、タイ（松明）などを作る。山入り班は、松明用の木やマカヤドマ用のススキに似た茅（イネ科の多年草)、杖、ツカ（墓標）などの材料を用意する。炊事班は午前のお茶と煮物作り、昼食、午後３時頃の葬式にもっていく食事の支度をする。食事は豚や刺身なども使われる。

③野辺送り

入棺は日が沈む前に子や甥など近親の男性で行う。お茶、草履、御賽銭などを入れ、遺族が「後のことは心配しないで成仏するように、夢を見せるなよ」というような声をかけてクァンバクの蓋を閉める。

「クァンバクを椎の木で作った担架にのせて、庭に面した縁側やオモテヤド（玄関）から出す。死者に一番近い青年二人が前後で肩に乗せ椎の木に結んだ縄を首からかけて、葬式の会場である共同墓地まで歩く。日が暮れて暗いのでタイ（松明）はイキフリ（墓堀り）の者が担当でイチバンタイ（一番松明)、イチバンマツ（一番旗）が立ち、一番、二番、三番とタイと旗が交互に並び（田畑 1992;166-167)」。

その後にマエジュク（前卓)、クァンバク、ツカ（角材に死者の名前、年齢、死亡日を書いた墓標)、遺影が続く。葬列が門口を出たら、死者が生前使っていた茶碗を門口で割る。二度と家に戻ってこないようにするためである。

④ソウシキ

共同墓地の入り口に着いたら、クァンバクを担いだまま反時計回りに三回まわってから焼香台の上に据え、写真を置く。三回まわすことで道をわからなくさせ、この世に戻ってこないようにすると言われている。会場には参列者が待機しており、シンセキ以外の参列者が順番に焼香を終え、係のものから焼酎を受け取り、身を清めてから帰る。通夜もソウシキも僧侶は呼ばない。

⑤埋葬

参列者が帰ると埋め役の青年とシンセキが残る。シンセキは 20 名から 30 名ほどである。「掘られたイキの中にマカヤドマを敷き、クァンバクを埋める。頭の方にツカを立て、それにヤギョを被せる。クァンバクを埋めた四隅に旗を立て、芦の方にマエジュクを置く。その隅に灯篭を立てる。「家には仏壇があり、土葬したときには神式の社を建てる」と言われている（津波 2014:60）」。

⑥シンセキの拝み

クァンバクを埋め終わると、マエジュクの前にマカドヤマを敷き、そこから頭の方に向かって拝む。それはソウシキ組、ミキャナンカ（三日七日）組、シジュウクニチ（四十九日）組（遠方からの人のことも考慮して仮シジュウクニチが行われる）に分けて行われる。これは同じ人がソウシキとミキャナンカは二度拝むことができないとされ、人数は偶数とされている。シンセキが喪家に戻ると、シンセキの人と加勢をした人たちに料理が出される。これはあと祓いと呼ばれている。

ソウシキから一週間は子供たちが夕方蝋燭を灯し、線香を二本立てる。一週間が過ぎれば旧暦の一日と十五日の墓参りのみとなる。

⑦シジュウクニチ

ソウシキの日にシジュウクニチの行事を終えているため、それと区別して本当のシジュウクニチとして、子や孫など、喪家に招かれた近親の者だけで墓参りに行く。その日に灯篭を焼く。招かれた人は改めて香典を出すため、喪家は香典の半返しをする。

⑧カイソ（改葬）

埋葬してから三年以上経つと、洗骨を伴う改葬が行われる。洗骨は女性（娘）の仕事と

され洗われた骨は骨壺に足の骨から順番に入れられる。カイソの日は改めてソウシキの日のようにご馳走を食べる。カイソは子や孫の「最後の親孝行」とされ、三十三回忌までには行わないといけないとされている。

土葬と改葬の語り

Ｔ・Ｙ氏（男性９０歳代）

「葬式が終わると加勢（テッタイ）をしてもらった人達に食事や焼酎でもてなした。通夜、葬式、三日七日、一週間休んで喪に服したものだ。坊さん（僧侶）は呼ばずに四十九日にユタ神様によるマブリワーシ（別し）を行ない、死に霊魂（マブリ）を近しい人のマブリから分離させる儀礼が行われていたことを覚えているよ。」

Ｙ氏（女性９０歳代）

「20 年ぐらい前（1980 年代）までは下の海岸河口の潮水で洗骨をしていた。腐臭がすごかった。洗骨は女性の仕事だったので大変だった。今はそういうことをやらなくなったので今の人は楽だね。」

Ⅳ．火葬の葬送祭祀儀礼

１．火葬への移行と問題点

加藤（2010）は、複葬（二重葬）体系をもつ奄美と沖縄[5]への火葬の導入と普及について、伝統的な複葬文化の維持と変容という観点から重要な問題点を提起している。それは火葬という葬法が死の直後に導入されるならば、風葬や埋葬によって死体の骨化をまち、死体に第二次葬を施すという複葬体系は崩壊せざるを得ない。人々が伝統的な葬送文化の維持を望むならば、火葬の導入を拒否する必要がある。あるいは、火葬の導入が避けられないのであれば、それが可能な時には、何らかの折衷案を見出して伝統の維持を試みなければならない（加藤 2010:16）と論じている。

奄美大島の火葬普及は昭和 40（1965）年代から始まったとされているが、火葬場の設立は比較的早く、奄美市斎場は大正 7 年（1918）年、瀬戸内町営火葬場が昭和 41（1966）年に設立されている。この火葬場の設立が人々の火葬に対する意識変化に少なからずの影響を及ぼしていると考えられる。

しかし、奄美大島の市街地以外の人々にとっては、道路事情や火葬に対する抵抗感[6]があ

り、土葬から直ちに火葬に移行したわけではなく、2000 年初め頃まで土葬と火葬が並行して行われており、火葬が定着するまで約 30 年～40 年を要している。

円集落に幹線道路網が整備されバスが開通するのは 1960 年代である。それまで奄美市内（旧名瀬市）へ出る手段は交通手段として船（ポンポン船）か徒歩で半日かけて通うしかなかった。この道路網の整備は奄美市内の葬儀社が葬送儀礼全般あるいは、一部に関与する契機となり、また、衛生観念の高まりも相まって、火葬が徐々に普及していくこととなる。

２．葬送儀礼の外部化

土葬（自葬）の頃の葬送儀礼行為は、地域の生活共同規範に従って、地域の人々の手で行われていたが、火葬の導入によって外部の別な規範をもった専門家の手に委ねられるようになってきた（加藤 2010:16）。このことを儀礼の外部化と呼ぶならば火葬の導入は、葬送儀礼の一部あるいは、すべての外部化を促す要因といえよう。

円集落においても奄美市内の葬祭業者[7]が葬儀全般に関与するようになり、病院や施設からの死者の搬送、火葬の手配、葬儀場の生花、仕出し、テントや看板、祭壇などの関連業務を担っている。また僧侶による読経（引導、表白）などの儀礼も葬祭業システムの中に組み込まれ、円集落の葬儀式において、通夜は自宅あるいは公民館、告別式は葬儀場、火葬は奄美市斎場で行うのが一般的である。土葬の頃のイキフリ（池堀り）やクァンバク（棺桶）、ヤギョ（神社の形をした板造りの墓）作りなど労力を伴う準備作業が無くなり、実践の簡素化と効率化が進められてきた。このように葬式が簡素化されることに次のような意見もある。

Ｋ氏（男性９０歳代）

「葬式が簡素化されて力仕事がなくなったのは年寄りにとって有難いことではあるが、人の死の別れがたつた１日で済まされるのは寂しい気がする。」

３．火葬による儀礼（納骨の儀）

奄美大島における葬儀は、葬儀社への葬儀全般的関与が進む中、円集落ではかつて土葬（改葬）の頃に行われていた野辺送り（門送り）が「納骨の儀」として継続的に儀礼化されているのである。奄美市内の葬儀場で告別式を行い、そして奄美市斎場で火葬をしたのち、集落の共同墓地の入り口にある共同焼香場に移動し、改めて告別式を執り行うのであ

る。従って告別式を二度行うことになる。

日本本土において、中世末期に成立する寺壇制度は、近世以降寺請制度によってさらに強化され、人々は菩提寺を持つことになり、よって葬送儀礼は一般的に仏式の葬儀式が浸透している。基本的には過程を追って様々な儀礼が重ねられていくもので、その形態は近代になってもそれほど変わってはいない（山田 2013:33）。喪家にて通夜を行った後、葬儀当日に出棺を行い、改めて葬儀場、火葬場、墓地で儀礼を行う形態である。

山田（2013）は葬儀をする空間について次のように論じている。葬儀は、生活領域である喪家と、死者の領域である寺院もしくは墓地、火葬での儀礼という二段階あるが、ここでは喪家での出棺を中心とした「内儀礼」、寺院[8]、墓地、火葬場などの遺体の変換を行う中心的な儀礼は「外儀礼」[9]と称している。かつて葬式というと狭義にはこの部分を指していた（山田 2013:36）。

奄美諸島の葬儀式は、寺院での葬儀が行われていないことを除けば、ほぼ日本本土と同様な形態で行われているものと考えられる。円集落の火葬による「外儀礼（納骨の儀）」について、2015 年 11 月に奄美市内葬儀社の A 社[10]、龍郷町円集落 E 区長、並びに古老（80～90 歳代）数名への聞き取り調査を行った。

①通夜

死者が出ると新聞社 2 社に広告を出す（この慣習は沖縄でも同じである）。広告代は死亡広告と会葬お礼で 15 万円から 20 万円ほどである。広告掲載主は子、兄弟、親族、友人代表など 10 名から 20 数名の連名となっており、奄美諸島は親族縁者が多いと言われる所以となっている。

通夜では、翌日の葬式のショクアテ（職当て）が行われる。参列者は、シンセキと集落の人が中心で、焼香が終わると食事と焼酎が出され、家族や親族と死者との思い出を語りながら適当な時間に帰る。食事は吸い物（シイタケ、エビ、豆腐など）、そうめん、かしわ（鶏）の煮物、海苔巻きなどが出される。通夜では坊さん（僧侶）は呼ばない。

②葬式当日

当日は朝からショクアテで決まった人達によって、墓さばくり[11]班、炊事班、山入り班、花つくり班に分かれて準備作業が始まる。墓さばくり班は主に青年層（20～40 歳代）が担い、女性達による炊事班で準備された吸い物を食べてから墓地に出向く。墓地では納骨堂の蓋を開けて内部の掃除、地下式納骨堂は上部の墓石を退けて内部の掃除を行う。②山入

り班は壮年（50～60 歳代）の担当で、松明、ツカ、杖、マエジュク（前卓）、旗竿、蝋燭立て竿[12]作り（写真 2、3、4、5）をする。

写真 2 マエジュク（前卓）、弔い旗

写真 3 灯篭、ツカ

炊事班の担当は、通夜のショクアテによりかねてより故人と付き合いのある集落の人にシンセキの使いの者が依頼する。葬式当日の墓さばくり班の吸い物作り、加勢の人の昼食と夜のあと祓いの食事作り、ミキャナンカの墓参りを担う。④花つくり班は、公民館で花作り [13]（金、銀、黄、紅白の造花）、草履、旗作り（写真 2、3、4、5）を敬老会の高齢者が中心となって作る。最近では、マエジュク、灯篭、草履、下駄などは葬儀社で準備することが多い（K氏）という。

写真 4　松明、ツカ、灯篭、花、弔い旗

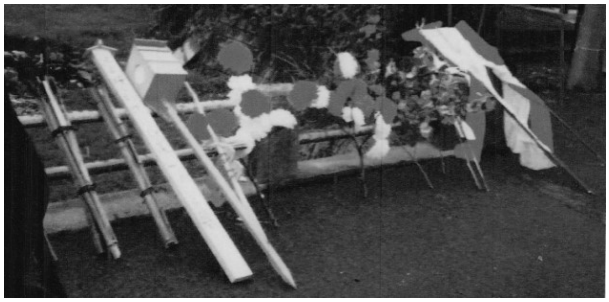


写真 5　草履、下駄

葬儀の作り物については、古谷野（2016）の八重山地方与那国島の葬儀における作り物の研究がある。与那国島では、葬儀社より伝わったとされる造花、前卓、位牌、笠、杖、灯篭、行灯、弔い旗などの作り物は葬儀の前日あるいは当日に親族や近隣の人々によって製作される。これらの作り物の多くが実用性はなく儀礼的なものであり、祭壇や墓前を飾り野辺の送りの葬列を華やかに演出したと論じている。

本土では、杖や草履は旅支度を意味し、死者があの世に旅経つ際に使われるものと考えられているが、奄美と沖縄も同じであると考えられる。古谷野（2016）は、作り物の役割について、魔よけの役割（墓地旗）、喪家の別れの場や葬列、墓前祭祀の場をはなやかに演出する役割（造花など）、葬儀会場に飾られる供花に相当する役割（弔い旗）があると述べている（古谷野 2016:272-284）。

円集落における作り物も笠を除くとほぼ同様な作り物となっているが、与那国島の作り物は葬儀社から伝わったものであり、円集落は先祖伝来（年数は定かではないが、明治期以来と考えられる）の作り物という違いがある。これらの作り物は葬列や墓地での祭祀を華やかに見せるための演出であるとともに人々の死生観に繋がっているとも考えられる。

しかし、近年の高齢化による担い手不足は、松明、ツカ、杖、マエジュク、旗竿、蝋燭立て作りを伴う山入りや花つくりは葬送儀礼の簡素化とともに次第に葬儀社に委託する傾向にあるという。

③門送り

自宅玄関から死者に一番近い青壮年四人が棺の前後を持ち霊柩車まで運ぶ。

④告別式

円集落から奄美市内の葬儀場迄車で約 1 時間かけて到着する。午前 10 時頃から葬儀社の手配による奄美市内寺院[14]の坊さん（僧侶）の読経により告別式を行う。特に宗派は問わないが創価学会や天理教であれば係の人を呼ぶという。

喪家は僧侶にお布施を渡し、その代わりとして戒名を入れた位牌を受け取る。参列者は集落の規範で香典 2,000 円と決められており、香典香返しもなく会葬お礼のハガキのみである（ただし、親族や集落以外の人はこの限りでない）。

A 葬儀社によれば、葬儀は仏式が 7 割と圧倒的に多く、その他はキリスト教、神道、新興宗教の順となっている。参列者は平均すると 200 人～300 人ぐらいであるが、1990 年代から 2000 年初頭にかけては 500 人ぐらい普通であった。それが、近年の人口減少と家族葬などの増加、また高齢のため参列したくても出来ない人が増えたことにより減少傾向にある（A 葬儀社 T 社長）という。

Ｋ氏の奥さん（８０歳代）

「ここいらはお寺さんもないし、坊さんを呼ぶとなると名瀬から呼ばんといかんか

ら、 葬式に坊さんを呼ぶようになったのは火葬が普及し、葬儀場で葬式をするようになってからだね。お布施は葬儀屋からは３万円から５万円が相場だと言われている。最近は、１万５千円から２万円のところも出てきており皆さん助かっていると言っている。ここいらは宗派によって坊さんを指定することはなく葬儀屋さんの言うおりだね。葬式を出すと金がかかるので私らの年金暮らしにはお布施は安ければ安いほどありがたい。」

⑤火葬

奄美市内にある奄美市斎場で死者が炉で焼きあがるまで、参列者は食事、お茶、酒を飲みながら死者の生前の思い出を語り合いながら待つ。一時間半ほどで焼きあがると拾骨室に移動し、死者に近い順から 1 人ずつ足の骨から順に取り上げ、最後に頭蓋骨を骨壺に入れて蓋をする。その後、車で約 1 時間かけて集落の共同焼香場まで帰る。

⑥納骨の儀（門送り）

納骨の儀の語り

Ｙ氏（男性８０歳代）

「納骨の儀は火葬が普及した頃よりやるようになり、今では一般的におこなわれるようになった。かれこれ 30 年ぐらいになるかね。まず、共同焼香場（写真 6）から墓場（写真 8）まで 6 本の蝋燭を立てる。死んだ人が道に迷わないようにする道標だよ。坊さんの読経と焼香が終わると参列者は松明、ツカ、灯篭、杖、花、遺影の順に橋（写真 7）を渡ってから遺族を囲んで左回りに 3 回まわる。これは二度とこの世に戻ってこないようにと言い伝えられている。

参列者は、納骨と拝みが済むと自宅に帰る。ここでは三日七日（ミキャナンカ）も済ますので近くに控えていた集落の女性たちがシバでもって拝みをする。墓参りが済むと女性たちは写真を裏返しにして帰る。葬式の日は、墓場に二度行くなという言い伝えがあるためである。納骨の儀が終わると参列者と加勢した人たちに「あと祓い」と呼ばれている食事と酒が振舞われ、家族と親族が接待する。」

写真 6　共同焼香場

写真 7　橋（川）

写真 8　円集落共同墓地

⑦供養

葬式後 1 週間は毎日子供たちが夕方灯篭に灯をともし、線香を 2 本立てる。そして、四十九日には子供、兄弟（姉妹）、孫までが集まり墓参りする。

それが終わると旧暦 1 日と 15 日は墓参りの習慣がある。これは土葬の頃から変化しておらず、高齢化が進んでいる今日では墓石の維持管理は大変な労力負担となっている（E 区長）。

Ⅴ．葬儀・七回忌における参与者の事例

①葬儀における参与者（図 6-1）

本報告書で取り上げる葬儀・七回忌の事例は、インフォーマントである E 氏の祖母の葬儀式の事例である。祖母（図 6-1、6-2）は円集落の M 家 11 人兄弟（姉妹）の三女として生まれ、同じ集落の E 家の長男のもとに嫁いでいる。兄弟の中で生存者は三人（次男、三男、六女）のみとなっている。夫は平成 10 年に 83 歳で亡くなり、子供は 6 人（二男四女）がいる。

長男は 3 人（2 男 1 女）の子供をもうけ、E 家を継いでいる。祖母は亡くなるまで長男と同居し、長男が葬儀の喪主を務めている。次男は東京に住み独身である。長女は 2 人（1 男 1 女）の子供をもうけ円集落に在住している。次女は 2 人（1 男 1 女）の子供をもうけ、三女は 2 人（2 男）の子供をもうけそれぞれ奄美市名瀬に在住している。四女は 1 人（1 男）の子供をもうけ大阪に在住している。

祖母は、平成 21 年 1 月 29 日未明に亡くなり、通夜は 1 月 29 日、告別式は 1 月 30 日に行われている。供養としての三回忌は平成 23 年 1 月 23 日、七回忌は平成 27 年 1 月 25 日に行われている。

葬儀に対する参与者の規範は、葬儀の実質的な運営を加勢する人たち、生花や果物籠など供物の提供、香典返しの配布、あと祓いに供する精進料理作り、あと祓いの参列者の接待などを通じて現れる。

②通夜、葬儀、納骨の儀（表 1 の参列者については故人との関係で呼称。）

故人は、29 日未明に亡くなったことから、朝早く親族が集まりその日に通夜と告別式の日取りが新聞広告に出された。また、通夜や翌日の葬式（納骨の儀）のショクアテが行われ、親族の使いの人が墓さばくり 3 人、炊事班 10 人を日頃から付き合いのある集落の人達に依頼し、装飾装具と花つくりについては A 葬儀社に委託したことから、集落の人の手は借りなかった。通夜は自宅で行われ、連れ合いを含む子供達 10 人、兄弟（姉妹）3 人、孫 11 人、甥、姪 21 人、集落の人達 10 人の参列があった。

葬儀、火葬、納骨の儀には、通夜に参列（集落の人を除く）した喪家、親族 45 人が同様に参列している。葬儀は奄美市内の A 葬儀社で行われたが、新聞広告を見た兄弟、姉妹、子供、孫たちの知り合いが告別式に 100 人以上参列している（香典数 200 人余）。龍郷町内での香典は 2,000 円と決められているが、親族や町外の参列者は 3,000 円から 5,000 円の香典をつつむ人が一般的であるという。

その後、奄美市斎場で火葬に付され、火葬が終わると集落の共同焼香場に移動し、僧侶による読経と焼香が済むと川を渡り、共同墓地で遺族、シンセキによる拝みと納骨が行われた。引き続いて集落の女性達によるミキャナンカの拝みが済むと喪家で「あと祓い」が行われ加勢をした人たちに食事と酒が出され、遺族と親族の人達が接待したという。

また、かつて行われていた仮のシジュウクニチは、参列者の出費が重なる問題もあり本来のシジュウクニチとして行われることが多くなっている。

③三回忌、七回忌（図 6-2）の参与者

三回忌は平成 23 年 1 月 23 日、七回忌は平成 27 年 1 月 25 日に自宅で行われている。法事は、奄美に住んでいる人を中心に呼ばれており、都市移住者は子供、兄弟以外はほとんど声掛けされないという。七回忌では連れ合いを含む子供たち 6 名、兄弟・姉妹 3 名、孫 8 名、甥・姪 7 名の 25 名の参列者があった。参列者は香典を持参し、当家ではお菓子などで香典返しする。三回忌、七回忌ともに僧侶は呼ばず、墓地に墓参りしてから自宅で吸い物、そうめん、煮物、海苔巻きなどの食事と酒を飲みながら故人の思い出を語り合いながら過ごすという。

表１　E 家故〇〇（インフォーマント E 氏の祖母）の葬儀・法事参与者数

儀礼項目	故人(m3)との関係	円集落の人達				奄美市内に居住している人達				他都市部に居住している人達				参列者合計(人)
		参加人数	性別（人）		婿・嫁	参加人数	性別（人）		婿・嫁	参加人数	性別（人）		婿・嫁	
			男性	女性			男性	女性			男性	女性		
通　夜(自宅)	子供	4	1	1	2（婿・嫁）	4		2	2（婿）	2	1	1		10
平成21年1月30日	兄弟	3	2	1		0	0	0		0	0	0		3
	孫	4	2	2		2	1	1		5	5			11
	甥・姪	5	2	1	2（婿・嫁）	16	2	6	8（婿・嫁）					21
	集落の人たち	10	4	6										10
	知人													
	参列者合計	26	11	11	6	22	3	9	10	7	6	1	0	55
墓さばくり班	集落の人たち	3	3	0										6
炊事班	集落の人たち	10		10										10
	加勢人数	13	3	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
告別式(A葬儀社)	子供	4	1	1	2（婿・嫁）	4		2	2（婿）	2	1	1		10
平成21年1月30日	兄弟	3	2	1		0	0	0		0	0	0		3
	孫	4	2	2		2	1	1		5	5			11
	甥・姪	5	2	1	2（婿・嫁）	16	2	6	8（婿・嫁）					21
	集落の人たち													0
	知人													0
	参列者合計	16	7	5	6	22	3	9	10	7	6	1	0	45
火葬	子供	4	1	1	2（婿・嫁）	4		2	2（婿）	2	1	1		10
(於)奄美市火葬場	兄弟	3	2	1		0	0	0		0	0	0		3
平成21年1月30日	孫	4	2	2		2	1	1		5	5			11
	甥・姪	5	2	1	2（婿・嫁）	16	2	6	8（婿・嫁）					21
	集落の人たち													0
	知人													0
	参列者合計	16	7	5	6	22	3	9	10	7	6	1	0	45
納骨の儀	子供	4	1	1	2（婿・嫁）	4		2	2（婿）	2	1	1		10
(於)円共同墓地	兄弟	3	2	1		0	0	0		0	0	0		3
平成21年1月30日	孫	4	2	2		2	1	1		5	5			11
	甥・姪	5	2	1	2（婿・嫁）	16	2	6	8（婿・嫁）					21
	集落の人たち	10		10										
	知人													0
	参列者合計	26	7	15	6	22	3	9	10	7	6	1	0	55
三回忌(自宅)	子供	4	1	1	2（婿・嫁）	2		2						6
平成23年1月23日	兄弟	3	1	1	1（嫁）									3
	孫	1		1		5	2	2	1（婿）	1		1		7
	甥・姪	7	3	4										7
	集落の人たち													
	知人													7
	参列者合計	15	5	7	4	7	2	4	1	1	0	1	0	23
七回忌(自宅)	子供	4	1	1	2（婿・嫁）	2		2		1		1		6
平成27年1月25日	兄弟	3	1	1	1（嫁）									3
	孫	3	1	1	1（嫁）	5	2	2	1（婿）					8
	甥・姪	7	3	4										7
	集落の人たち													
	知人													
	参列者合計	17	6	7	4	7	2	4	1	1	0	1	0	25

図 6-1　E 家・M 家関係

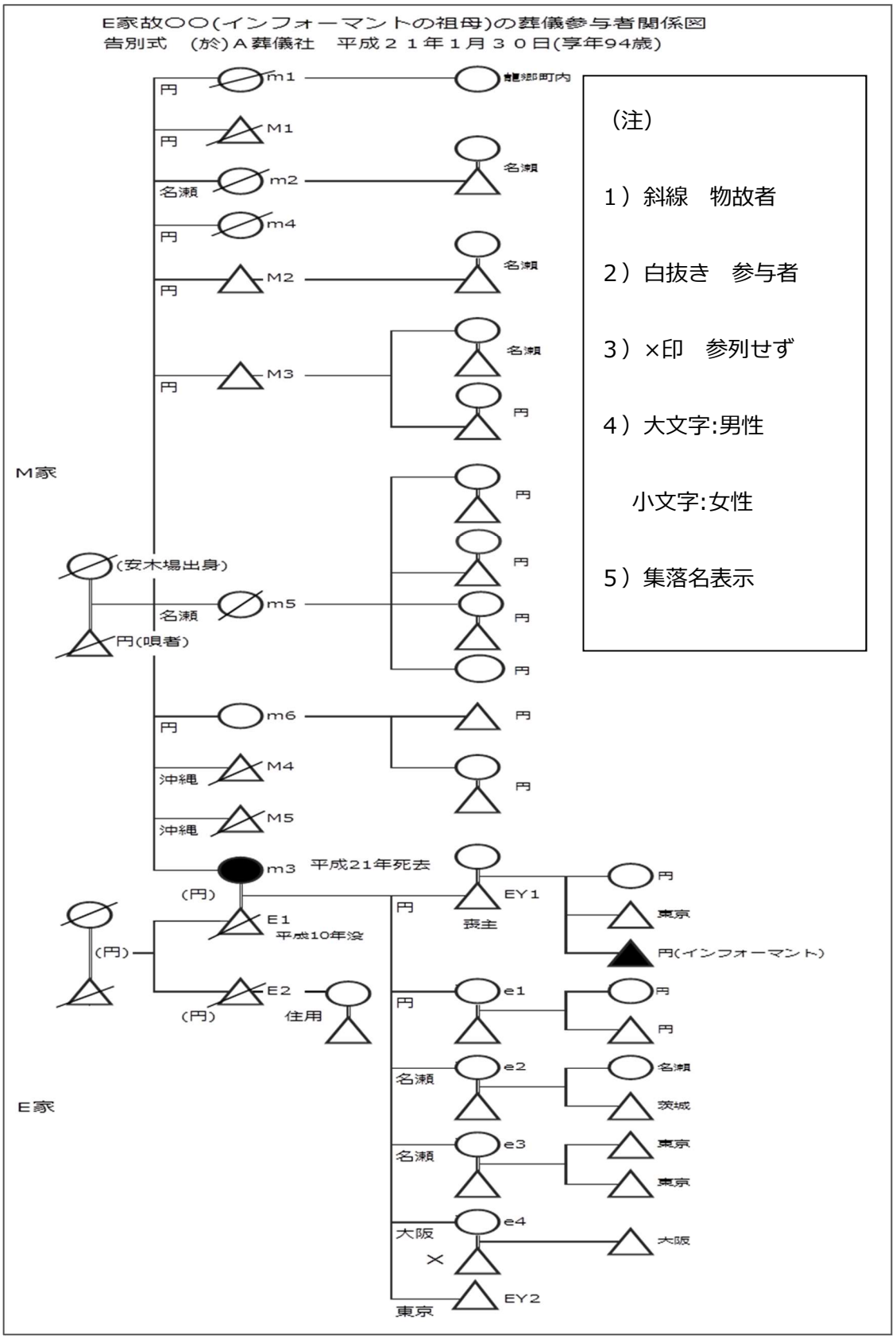
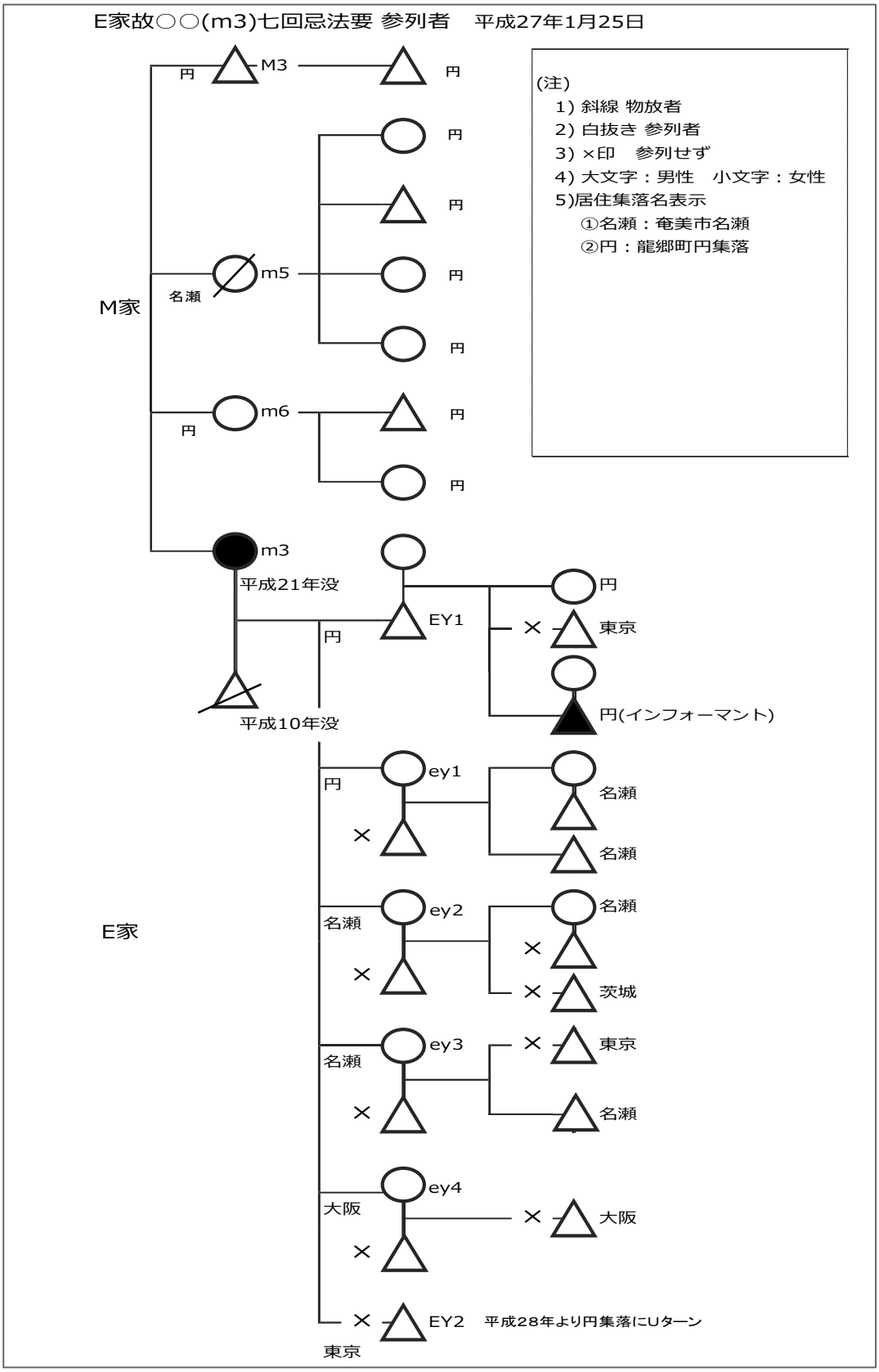

E家故〇〇(インフォーマントの祖母)の葬儀参与者関係図
告別式　(於)Ａ葬儀社　平成２１年１月３０日(享年94歳)
（注）
1）斜線　物故者
2）白抜き　参与者
3）×印　参列せず
4）大文字:男性
小文字:女性
5）集落名表示
M家
E家
m1
M1
m2
m4
M2
M3
(安木場出身)
m5
円(唄者)
m6
M4
M5
m3
平成21年死去
E1
平成10年没
E2
住用
EY1
喪主
e1
e2
e3
e4
EY2
東京
円(インフォーマント)
名瀬
茨城
大阪
沖縄
円
(円)

図 6-2　E 家・M 家七回忌参与者関係図



Ⅵ.まとめ

１．葬送儀礼の地域性

土葬の頃に集落の相互扶助で行われていた自葬が、火葬に移行したことにより、葬儀社が葬儀全般に関与するようになってきた。このことによって土葬によるイキフリ（池堀り）やクァンバク（棺）、ヤギョ（板で作った家形墓）作りなどの労力負担は軽減するも、お布施や葬儀場、火葬場の使用料[15]など経済的負担が増しているのが現状である。

円集落における葬送儀礼の特徴として、かつての土葬の頃に行われていた門送り（集落の人達による野辺送り）が共同墓地に納骨の際、「納骨の儀」として継承されている。このような儀礼が継承されているのは、隣の秋名集落や大和村など数か所のみである。

円集落のような社会的紐帯によって維持されている儀礼は、都市化につれて共同体的儀礼から個人的儀礼に変化する（山田 2007:124-127）とされている一般的な分析とは異なり、局所的な簡素化と改変による「連続性の保持」へと繋がっていると考えられる。

また、告別式に僧侶を呼び、お布施を渡すようになったのは、火葬が一般的になってからであり、位牌に戒名をつけるようになったのもこの頃からである。

つまり、奄美の葬送儀礼は、津波（2012）のいう薩摩支配下における文化的影響の同一的な観点よりも、むしろ、近代化過程の中で沖縄と本土双方から自己都合的に受容しながら、それぞれの地域に適合した儀礼文化を継承してきたものと考えられる。

２．葬送祭祀儀礼の事例に見る参与者の動向

葬儀事例による図 6-1 では、故人の婚家のＥ家の子供（連れ合い含む）、孫（都市移住者含む）と実家のM家の兄弟（次男、三男）・姉妹（六女）、甥・姪（連れ合い含む）の殆どの親族が参列している。葬儀では故人の兄弟、姉妹が多いということもあり、甥、姪が 21 人出席（連れ合いも含む）している。

ところが、図-2 による七回忌では、子供の連れ合いや都市移住者の孫、甥・姪の連れ合いは参列していないことになっている。その理由として、三回忌、七回忌は奄美に住んでいる人以外は呼んでいないということもあるが、それよりも孫や甥・姪の世代になると次第に親族の関係性が薄れていく傾向にあるのではないかと考えられる。

しかし、このような親族の関係性が薄れていく傾向にあるとは言え、奄美社会における先祖崇拝意識は根強く残っており、地元の人は旧暦 1 日、15 日に慣習として墓参りがあり、墓の掃除や生花を供える。そして、奄美市内に移住した人たちは頻繁に帰郷し、老親の世話、家産や祖先の墓の維持、地元の祭りなど地域との関係性を維持しているという。

また、三回忌、七回忌に参列していない都市移住者のＥ家次男（ＥＹ2）は定年を迎えるとＵターンし、円集落に居住している。

このような地縁・血縁で結ばれた集落と都市移住者の関係性を考えるとき、Wellman（2010）によれば、居住地が近接していることは援助提供を促す要因であるが、同じ地域に住んでいると言っても、その地域が意味するのは今や近隣地区だけではなくて大都市圏まで拡大している。このことは、近隣地区の連帯による活動が重要なのではなく、物理的（車、公共交通機関の利用等）に援助を入手できるかが問題となってくる。親族であることと、同じ大都市圏に居住していることは、いずれも接触頻度を増加させる要因となっている（Wellman,Barry2010:186）と論じている。

従来、東京（羽田）と奄美大島の航空便はJALの１日１往復便だけであった。2014年、バニラ・エアの就航により便数の増加（両社合わせて2往復便）と共に、航空運賃も片道（従来の標準片道運賃約３万円）3分の1から10分の1（バニラ・エアのネット予約運賃）の割安運賃になった。このバニラ・エアの就航により、それまで数年に一度、二度しか帰省しないといわれていた多くの関東奄美出身者が、それ以来、年に数回も帰省する人が増えているという。このことは地元との接触頻度を増加させる要因ともなっていると考えられる。

また、奄美市内に住んでいる人は頻繁に親元に援助提供をし、都市移住者は郷友会を作り出身者同志の接触頻度を重ね紐帯を強める。そして、定年になればＵターンして出身地に居住する。このようなことから推察すると、奄美出身の都市移住者は地域コミュニティに深く関与していることに他ならないのではないかと考えられる。

３．葬送祭祀儀礼の継続性

円集落では、区長を中心に自治会や地域行事を通じて世代間のブリッジングを頻繁に行っている。区長の役割として、この地域は独居高齢者も多く、身の回りの世話や亡くなった後の葬式や墓などのよろず相談ごとをおこなっているという。

また、円集落のＫさん（元教師、90歳代）は、他出の教え子30数人に地域の出来事や他出者の声などを掲載した情報誌「円だより」を30年来発刊しており、集落と都市移住者間の情報ネットワークを形成している。この活動によりそれぞれの情報の往還、あるいは帰省して地元への理解と絆を深める人が多いという。

円集落における社会的機能として、高齢者の果たす役割は大きく、ハマオレ[16]、種おろしにおける八月踊り[17]などを通じて頻繁に世代間の交流を実践し、集落としての共同性[18]を生

み出している。今まで継承してきた「納骨の儀」も高齢化が進む中で、労力を伴う山入りや花つくりなど葬儀社へ委託することが多くなっており、伝統的な葬送祭祀儀礼がいつまで続けられるか不透明である。しかし、世代間（都市移住者を含めた）の交流を通じて生み出された共同性は、局所的な改変を織り込みながら継承されていくものと思われる。

注

[1] 葬送儀礼は臨終から埋葬や火葬を中核とする一連の儀礼であり、法要、法事（供養）は祭祀儀礼として区別する（山田 2007:13）。

[2] 奄美諸島では集落のことを「シマ」と呼称している。

[3] 親族を示す現地語で、双系的な系譜認識を前提とした地縁・血縁集団が複雑かつ濃密に綜した形で形成される親族組織（及川 2014:230）。

[4] 父方あるいは母方のヒキ成員である血縁・婚姻関係で結ばれた双系性姻戚関係（中根 64:141-142）。

[5] 沖縄の火葬は、戦前、戦後にかけて行政側によって火葬推進がなされ、1970 年岱以降には一部の離島を除きはっきりと定着している（加藤 2010:70）。

[6] 奄美の人々にとっては、「人間の体を焼くことに対する抵抗感があるといえる。そこには、無残とか可哀そうという感情とともに、洗骨を済ませてこそ死者を供養したことになるとう死者供養の価値観に関わる問題とも言える」（上野 1983:238）。

[7] 奄美市内葬祭場（青葉社、ルミエール奄美、秋葉屋、公益社など 7 社。

[8] 奄美大島の寺院は奄美市と瀬戸内町のみであり、法事は行われるが葬儀はほとんど行われない。

[9] 現行法の「墓地、埋葬等に関する法律」（昭和 23 年 5 月 31 日法律 48 号）のもととなった「墓地及埋葬取締規則」（明治 17 年制定）の第 6 条においては、「葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内、又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ」とあり、ここでは、外儀礼を寺堂もしくは家屋構内、墓地、火葬場と建物内外での外儀礼に限定している。これは内儀礼とともに外儀礼も重視されていたものと思われる（山田 2013:36）。

[10] Ａ葬儀社は、従業員 20 名の中堅葬儀社である。商圏は竜郷町、大和孫、奄美市笠利地区など主に郊外部に互助会会員 6,000 人（会費 3,000 円）の地盤を持っている。

[11] 火葬後の納骨をするために地上式納骨堂の蓋を開け、内部の骨壷の整理と掃除をする。地下式納骨堂については墓を移動して蓋を開け、同じように内部の整理と掃除をする。

[12] 椎の木が多く使われている。常緑高木で暖地の海岸付近に多い（広辞苑）。

[13] 椿や竹の枝に取り付けられる。

[14] 奄美市内の寺は、浄土真宗（大光寺）、真言宗（光明寺）、西本願寺（大正寺）、東本願寺がある。

[15] 奄美市斎場使用料:奄美市市民 13,000 円、その他地域住民 30,000 円（奄美市斎場使用料規約より）。

[16] 旧暦 3 月 3 日は干満の差が大きく、浜に出て豊穣祈願と身を清める行事である。この日はご馳走を持ち寄って食べ、船漕ぎ競争やカラオケ大会などで集落内の交流を行っている。

[17] アラシツ（新節）、シバサシ、ドンガ（）はミハチガツ（南東の正月）と言われ 8 月の代表的行事である。このうちドンガは夏の行事の最後のものとする意識が強く、種おろし行事として八月踊りも踊り納める。かつて洗骨（改葬）もこの日に行われた集落も多い（小野 1994:216-217）。

[18] 共同性＝秩序、暗黙の前提、枠組みとして定義する（慶田 1994:126-144）。

参考文献

上野　由紀

1983　「葬送儀礼と祖霊感」『民俗文化』7、跡見学園女子大学民俗文化調査会、P.238。

Wellman,Barry

2010　「コミュニティ問題」『リーディングスネットワーク論』野沢慎司、立山徳子（訳）、勁草書房、P.184-186。

古谷　野洋子

2016　「葬儀の作り物とその考察―沖縄県与那国島の葬儀の事例」『沖縄文化研究紀要』（43）、法政大学沖縄文化研究所（編）、pp.243-292。

及川　高

2014　「近代奄美における親族と墓の変容―民俗の変容からみた民衆史の試みー」『沖縄文化研究』法政大学沖縄文化研究所（編）、法政大学沖縄文化研究所、pp.230-231。

小野　重郎

1994　『南島の祭り』第一書房。

加藤　正晴

2010　『沖縄奄美の火葬と葬墓制―変容と持続―』榕樹書林。

慶田　勝彦

1994　「暴力」『人類学のコモンセンス―文化人類学入門』浜本満、浜本まりこ（編）、学術図書出版社、pp.126-144。

田畑　千秋

1992　『奄美の暮らしと儀礼』第一書房。

津波　高志

2012　『沖縄側から見た奄美の変容』第一書房。

中根　千枝

1964　「ヒキの分析」『東洋文化研究所紀要』（40）、pp.119-155。

松濤　弘道

2009　『世界の葬送』「世界の葬送」研究会（編）、イカロス出版、pp:151-155。

山田　慎也

2007　『現代日本の死と葬儀―葬祭業の展開と死生』東京大学出版会。

謝辞

本報告書をまとめるにあたり、龍郷町役場の関係者、龍郷町円集落Ｅ区長、Ｋ氏、円集落の皆様、そしてＡ葬儀社のＴ社長様にはお忙しい中、貴重なお話をお聞かせ頂き誠に有難うございました。本報告書を借りてお礼申し上げます。